

<資料>

UPI からみた大学生の入学後の メンタルヘルスの変化

泉水 紀彦*・茅野 理恵*・佐野 司*

A Longitudinal Study of Mental Health in College Students Measured by Upi

Toshihiko SENSUI*, Rie CHINO* and Tsukasa SANO**

抄 録

本研究の目的は、UPI 学生精神的健康調査を用いて、A大学の大学生を対象に4年間のメンタルヘルスの変化を検討することだった。X年入学の164名を対象に、毎年4月に調査を実施し、大学生116名を分析対象とした。その結果、(1) A大学における「自覚症状」「Key項目」「陽性項目」は他大学の結果と変わらず、良好であった。(2) 年次による変化は、「対人不安」、そして「考えがまとまらない」「他人の視線がきになる」「こだわりすぎる」の3項目において、1年次をピークに減少傾向がみられた。(3) 性差は「対人不安」でみられ、女性のほうが男性よりも得点が高かった。「首筋や肩がこる」「気疲れする」「何事にもためらいがちである」などの身体的訴え、対人場面での敏感さ、自信のなさを示す項目でも、女性の得点が高かった。(4) 年次と性別の両方の要因による影響がみられたのは、「精神身体的訴え」得点で、男性は2年次以降で減少傾向、女性は2年次以降も横ばいか上昇傾向であった。また女性は4年次に消化器系や生殖系の不調を訴える人が増加することが明らかになった。(5) UPIの項目別回答率の上位10項目を他大学の結果と比較したところ、情動の不安定さや疲労感、自己不確実性を示す項目が共通していた。以上の結果から、A大学の学生のメンタルヘルスの変化が明らかになり、学生相談室での援助の必要性が再認識された。今後、休学・退学した学生の分析を行うことと、異なる年度入学のデータも追加して、分析する必要があると考えられる。

キーワード：UPI、精神的健康、大学生、縦断的調査、学生相談室

問題と目的

大学生が学生生活を過ごす青年期後期

は、精神分析学者のエリクソン (Erik H., Erikson) が指摘したように、急速な身体的発達・性的成熟により、従来の同一性がゆら

* 経営情報学部非常勤講師 (カウンセラー)、Tsukuba Gakuin University

** 経営情報学部非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

*** 情報コミュニケーション学部情報メディア学科、Tsukuba Gakuin University

ぎ、新たに自分が何であり、自分の社会的な役割は何なのかと探し求める不安定な時期である。したがって、大学生は、さまざまな心理的問題が発生する時期であることが指摘されている（沢崎・松原、1988；福田、2007）。西山・笹野（2004）によると、青年期後期はスチューデントアパシーや対人恐怖、自殺などの適応障害が出現したり、精神疾患が発症しやすい時期である。このような多種多様な悩みに対して、学生相談室や保健管理センターを通じた予防的介入や援助が重要である。

大学生の精神身体上の諸問題を把握するためのUPI学生精神的健康調査（University Personality Inventory、以下UPI）という調査票が有名である。主に新入生の精神身体的な問題を把握し、早期介入するためのスクリーニングテストとして頻繁に使用されている。加えて、各大学生の精神健康の実態把握にも利用されており、多くの先行研究で各大学のメンタルヘルスの実態調査が行われている（沢崎・松原、1988；吉武、1995；西山・笹野、2004；前垣・滋野、2011）。本学においても、中井・茅野・佐野（2007）がA大学のメンタルヘルスの実態を明らかにしている。

UPIの年次変化を扱った研究はいくつかみられる。坂口（2009）は、2004年度入学から2009年度入学までの新入生を比較して、その特徴を検討しており、心気症的な学生の増加を指摘している。また願興寺・小塩・桐山（2007）は、1988年度入学から2006年度入学の学生のメンタルヘルスを比較・検討したところ、精神的・身体的自覚症状の漸増が生じていたと報告している。このような文化背景や時代的变化による大学生の特徴を検討した研究はみられるが、同一集団を大学入学年次（1年次）から大学卒業年次（4年次）まで縦断的に調査した研究はみられない。大学生のメンタルヘルスを縦断的に調査することで、大学生の心の問題の実態そして経年によ

る変化を把握することができ、時期に即した援助を提供することが可能になるだろう。

そこで本研究の目的は、UPIを用いて、1年次から4年次までの4年間における大学生のメンタルヘルスの変化を明らかにすることである。私立大学Aでは、毎年4月に全学年の学生を対象にUPIを実施していることから、今回はX年に入学した大学生を対象とし、4年間のメンタルヘルスの変化を、年次、性別そして年次と性別の組み合わせ要因から検討を行った。

A大学は2006年に新設された大学であり、先行研究では旧女子大学や大学新設によるメンタルヘルスへの影響が明らかにされたが（中井他、2007）、本研究では、新設から数年たって安定した大学環境に置かれたX年入学の学生を対象にし、メンタルヘルスの変化を検討した。

方法

調査対象

関東地方の私立大学Aは、2004年から現在に渡って、全学を対象としたUPI調査を実施している。私立大学Aは、国際系学科とメディア系学科の二つの学部から構成されている。

今回の対象としたのは、X年に入学した学生で、全調査対象者数は164名（男性66名、女性66名、不明32名）であった。このうち欠損値を含んだ調査対象者が48名存在したことで、縦断的検討という本研究の目的から鑑みて、分析から除外した。その結果、本研究では116名（男性62名、女性54名）を分析対象とした。

調査内容

UPI 学生精神的健康調査 大学生のメンタルヘルスの実態を調査するために、全国大学保健管理協会（1966）が作成した調査票であ

るUPIを使用した。UPIは、大学新入生を対象とした質問紙で、問題のある学生の早期発見・早期治療を目指して、スクリーニングテストとして開発された。精神的・身体的自覚症状を測定する56項目と、陽性項目4項目から構成され、全60項目からなっている。自覚症状のうち、「1. 食欲が無い」「8. 自分の過去や家庭は不幸である」「16. 不眠がちである」「25. 死にたくなる」は、面接の呼び出し対象となる「Key項目」とされる。陽性項目は「5. いつも体の調子がよい」、「20. いつも活動である」、「35. 気分が明るい」、「50. よく他人に好かれる」から構成され、Lie Scale（ライ・スケール）として扱われることが多いが、本研究では沢崎・松原（1988）に倣い、「心身の快調さ」を示す指標として分析に用いた。

UPIの質問項目（自覚症状項目）は、訴え内容別に分類することができるため（吉武、1995）、「精神身体的訴え」16項目、「うつ傾向に関するもの（抑うつ傾向）」20項目、「対人面での不安に関するもの（対人不安）」10項目、「強迫傾向や被害・関係念慮に関するもの（強迫傾向・被害関係念慮）」10項目の4グループに分類して、分析を行った。

調査時期

A大学では新設された2006年から2011年までに毎年4月にUPI調査を実施された。本調査はこのうちX年からX+3年に実施した。

実施方法

健康診断時に調査を実施した。調査時間は10分から15分で、記名式で行った。調査対象者には、回答の匿名性は確保されること、質問への回答は自由意志であること、回答したくない項目があれば回答しなくても良いことを説明する文章を示した。氏名、年齢、性別、家族構成を記入してもらい、「これは、多く

の人がしばしば経験することを列挙したもので、あなたの健康に理解と増進のための調査です。あなたが、最近1年間位の中に、感じたり、経験した項目の（ ）に○印をつけてください。」という調査票に記載した教示文を提示した後に、回答を求めた。UPI回答後、相談希望の有無を記入してもらい、調査対象者が回収ボックスに入れる形で回収した。統計分析ソフトウェアにはIBM SPSS Statistics Version 19（IBM社製）を使用した。

結果と考察

1. 調査全体のUPI得点とUPI訴え別の平均値の特徴と年次による変化の検討

A大学調査対象者全体の傾向をみるために、各年度の自覚症状、Key項目、陽性項目、訴え内容（精神身体的訴え、抑うつ傾向、対人不安、強迫傾向・被害関係念慮）の平均値と標準偏差を算出した（Table 1）。UPIの各項目得点の平均値の幅（最小値－最大値）を記述すると、「自覚症状」（56点）の平均値は8.30（2年次）－9.79（1年次）で、「Key項目」（4点）では0.37（4年次）－0.45（1年次）、「陽性項目」（4点）では0.56（1年次）－0.59（3年次）であった。また同様に、訴え内容別に平均値を記述すると、「精神身体的訴え」（16点）では2.04（2年次）－2.29（1年次）、「抑うつ傾向」（20点）では3.70（2年次）－4.24（1年次）、「対人不安」（10点）では1.29（4年次）－1.70（1年次）、「強迫傾向・被害関係念慮」（10点）では1.16（4年次）－1.56（1年次）であった。

他大学で報告されている結果と比較すると、近年の研究で自覚症状平均値は、11.0（吉武、1995）、20.30（西山・笹野、2004）、7.03（願興寺他、2007）、9.02（中井他、2007）、13.72（前垣・滋野、2011）と報告されており、本研究で得られた得点（8.30－9.79）は、おおむね他大学の結果と同様であっ

Table 1 各年次におけるUPI得点と訴え内容別の平均値と標準偏差

	1年次		2年次		3年次		4年次		F値	多重比較
	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)		
【UPI】										
自覚症状	9.79	(9.69)	8.30	(9.99)	8.82	(10.83)	8.31	(10.43)	3.66	
Key項目	0.45	(0.66)	0.44	(0.75)	0.38	(0.72)	0.37	(0.69)	2.12	
陽性項目	0.56	(0.95)	0.58	(0.90)	0.59	(0.90)	0.56	(0.91)	0.001	
【UPI・訴え内容別】										
精神身体的訴え	2.29	(2.77)	2.04	(2.80)	2.20	(2.87)	2.14	(2.76)	0.24	
抑うつ傾向	4.24	(4.18)	3.70	(4.24)	3.93	(4.77)	3.72	(4.60)	1.73	
対人不安	1.70	(2.00)	1.39	(2.22)	1.36	(2.14)	1.29	(2.17)	5.26	*1年次>4年次
強迫傾向・被害関係念慮	1.56	(1.98)	1.17	(1.97)	1.33	(2.21)	1.16	(2.15)	3.15	

*: $p < .05$

た。特に、本研究と同じA大学を対象とした中井他(2007)の得点と近い結果が得られた。Key項目と陽性項目については、先行研究のKey項目0.54、陽性項目0.63(中井他、2007)、Key項目0.8、陽性項目0.68(前垣・滋野、2011)といった結果と類似か少し低い値であった。

年次(経年)によるメンタルヘルスの変化を検討するために、年次(1要因4水準)を被験者内要因とした1要因の分散分析を行った(Table 1)。その結果、「対人不安」で有意な主効果がみられた($F(1, 115) = 5.26, p < .05$)。多重比較を行ったところ、4年次よりも1年次のほうが対人場面で感じる不安が高いことが示された。その他のUPI項目、訴え内容別項目では有意な差はみられなかった。「対人不安」得点に差異がみられたことから、入学時に強く感じていた不安感が学年・年齢を経るに従い、減少していき、メンタルヘルスが改善していくことが明らかになった。また、有意ではなかったものの、自覚症状と強迫傾向・被害関係念慮でF値が有意傾向(自覚症状: $F(1, 115) = 3.66, p < .10$; 強迫傾向・被害関係念慮: $F(1, 115) = 3.15, p < .10$)であり、どちらも1年次よりも2年次の時の得点が低くなっていた。入学時(1年次)は、新しい環境や交友関係に

身をおくことが多く、自覚症状得点のようなメンタルヘルスの悪化がみられるだろう。入学時のスクリーニングの重要性が、支持された結果だと考えられる。

2. UPI得点とUPI訴え別における性別と年次の影響の検討

男女ごとに年次によるメンタルヘルスの変化を検討するために、UPI合計得点とUPI訴え内容別得点を性別ごとに、そして年次ごとに、平均値と標準偏差を算出した(Table 2)。変化を検討するために、性別を被験者間要因(2水準)、年次を被験者内要因(4水準)とした2要因の分散分析を行った。各従属変数についての主効果、交互作用のF値をTable 3に示した。「精神身体的訴え」で、交互作用がみられた($F(3, 342) = 2.64, p < .05$)。単純主効果の検定を行ったところ、4年次において男性($M = 1.45$)よりも女性($M = 2.93$)の方が精神身体的訴え得点が有意に高く、男性では1年次よりも4年次のほうが有意傾向で低かった。「対人不安」では、性別の主効果が有意であった。女性のほうが男性よりも対人場面での不安を強く感じていた。「自覚症状」、「Key項目」、「陽性項目」、「抑うつ傾向」、「強迫傾向・被害関係念慮」では、有意な主効果そして交互作用

Table 2 各年次と性別における UPI 得点と訴え内容別の平均値と標準偏差

	上段 (男性)	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次	
	下段 (女性)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)	<i>M</i>	(<i>SD</i>)
【UPI】									
自覚症状		8.47	(9.61)	6.40	(7.31)	7.73	(8.98)	6.71	(9.12)
		11.31	(9.66)	10.48	(12.08)	10.07	(12.60)	10.15	(11.56)
Key 項目		0.48	(0.67)	0.34	(0.60)	0.32	(0.57)	0.31	(0.59)
		0.41	(0.66)	0.56	(0.88)	0.44	(0.86)	0.44	(0.79)
陽性項目		0.55	(0.94)	0.48	(0.78)	0.52	(0.94)	0.53	(0.86)
		0.57	(0.98)	0.69	(1.01)	0.67	(0.85)	0.59	(0.96)
【UPI・訴え内容別】									
精神身体的訴え		2.11	(2.71)	1.64	(2.28)	1.79	(2.45)	1.45	(2.03)
		2.50	(2.84)	2.50	(3.26)	2.67	(3.26)	2.93	(3.26)
抑うつ傾向		3.56	(4.06)	3.00	(3.52)	3.56	(4.26)	3.29	(4.54)
		5.02	(4.22)	4.50	(4.85)	4.35	(5.31)	4.22	(4.67)
対人不安		1.44	(1.91)	0.79	(1.45)	1.06	(1.46)	0.92	(1.75)
		2.00	(2.06)	2.07	(2.72)	1.70	(2.70)	1.72	(2.51)
強迫傾向・被害関係念慮		1.35	(1.81)	0.97	(1.56)	1.31	(2.04)	1.05	(1.93)
		1.80	(2.16)	1.41	(2.34)	1.35	(2.42)	1.28	(2.38)

Table 3 各従属変数における分散分析の主効果と交互作用の *F* 値

	性別	年次	性別×年次
	<i>F</i> (1,114)	<i>F</i> (3,342)	<i>F</i> (3,342)
【UPI】			
自覚症状	3.37	2.45	0.73
Key 項目	0.91	0.72	1.86
陽性項目	0.38	0.05	0.36
【UPI・訴え内容別】			
精神身体的訴え	3.85	0.51	2.64*
抑うつ傾向	2.48	1.49	0.76
対人不安	5.9*	2.43	2.07
強迫傾向・被害関係念慮	0.75	2.73	0.69

 * : $p < .05$

はみられなかった。

以上の結果から、性差による影響を検討すると、性差のみの影響がみられたのは、「対人不安」についてで、女性の方が男性よりも高い得点であった。中井他(2007)の研究では、性差がみられなかったが、前垣・滋野(2011)では、他の訴え内容別得点と同様に、対人不安でも性差がみられ、女性の方が男性よりも得点が高かった。性差と年次による影響がみ

られたのは、「精神身体的訴え」得点についてであった。中井他(2007)や前垣・滋野(2011)でも、「精神身体的訴え」に性差がみられ、女性の得点は男性よりも高かった。本研究の結果でも性差による差異がみられ、男性よりも女性のほうの得点が高かったが、年次による変化を加味して性別ごとに記述すると、男性は1年次において女性と同じ得点で差異はないが、2年次以降は精神身体的な訴

えは減少に生じていた。その一方、女性は1年次に男性と同じ程度だったが、2年次以降は変化なしか上昇傾向であった。性差によって経年によるメンタルヘルスの変化に差異が生じることが明らかになった。

3. UPI 各項目における性別と年次の影響の検討

UPI60項目について、性別と年次の要因を検討するために、各項目を従属変数とした2要因の分散分析を行った。

「精神身体的訴え」各項目では、「1. 食欲が無い」(性別： $F(1, 114) = 4.16, p < .05$)、「2. 吐き気・胸焼け・腹痛がある」(性別： $F(1, 114) = 6.19, p < .05$)、「3. わけもなく便秘や下痢をしやすい」(交互作用： $F(3, 342) = 4.02, p < .01$)、「16. 不眠がちである」(交互作用： $F(3, 342) = 2.68, p < .05$)、「18. 首筋や肩がこる」(性別： $F(1, 114) = 10.98, p < .01$)、「33. 身体がほてったり、冷えたりする」(性別： $F(1, 114) = 7.43, p < .01$)、「34. 排尿や性器のことが気になる」(交互作用： $F(3, 342) = 4.12, p < .01$)で、有意な主効果そして交互作用がみられた。平均値と標準偏差、分散分析の主効果・交互作用の結果をTable 4に示した。性別の主効果がみられたのは、「1. 食欲が無い」、「2. 吐き気・胸焼け・腹痛がある」、「18. 首筋や肩がこる」、「33. 身体がほてったり、冷えたりする」であり、いずれの項目でも男性よりも女性の方の得点が高かった。性別と年次の交互作用は、「2. わけもなく便秘や下痢をしやすい」、「16. 不眠がちである」、「34. 排尿や性器のことが気になる」においてみられた。交互作用を詳細に検討するために、各項目の単純主効果の検定を行った。「2. わけもなく便秘や下痢をしやすい」では、4年次で女性は男性よりも、そして女性は3年次よりも4年次のほうが便秘や下痢を訴える人が多かった。同様に、「34. 排尿や性器のこ

とが気になる」では、女性の4年次の得点が男性よりも高く、1年次や3年次の時よりも有意に高くなっていた。「16. 不眠がちである」では、男性は1年次よりも4年次の方が低値であった。このことから、男性は学年経過に従って、不眠の報告が減少する傾向がみられた。

「抑うつ傾向」各項目では、「11. 自分が自分でない気がする」(年次： $F(3, 342) = 2.64, p < .05$)、「14. 考えがまとまらない」(年次： $F(3, 342) = 2.84, p < .05$)、「22. 気疲れする」(性別： $F(1, 114) = 4.98, p < .05$)で、有意な主効果がみられた(Table 5)。交互作用はいずれの項目にもみられなかった。主効果がみられたので、多重比較を行ったところ、「11. 自分が自分でない気がする」では有意な差はみられず、「14. 考えがまとまらない」では1年次のほうが4年次よりも考えのまとまらなさを報告している人が多く、「22. 気疲れする」では、女性の方が男性よりも多く報告していた。

「対人不安」各項目では、「36. なんとなく不安である」(交互作用： $F(3, 342) = 3.46, p < .05$)、「38. ものごとに自信が持てない」(性別： $F(1, 114) = 4.47, p < .05$)、「39. 何事にもためらいがちである」(性別： $F(1, 114) = 6.76, p < .05$; 年次： $F(3, 342) = 2.77, p < .05$)、「40. 他人に悪くとられやすい」(交互作用： $F(3, 342) = 3.22, p < .05$)で、有意な主効果と交互作用がみられた。その結果をTable 6に示した。交互作用が見られた項目を検討するために、単純主効果の検定を行った。「36. なんとなく不安である」では、2年次と4年次において、男性よりも女性の得点が高かった。男性においては、1年次に比べて2年次は得点が低く、女性においては、4年次に比べて3年次の得点が低かった。「40. 他人に悪くとられやすい」では、2年次において、男性よりも女性の得点が高かった。また女性の2年次の得点

Table 4 精神身体的訴え各項目と抑うつ傾向各項目における性別と年次ごとの平均値と標準偏差および分散分析の結果

	上段 (男性)	1年次		2年次		3年次		4年次		主効果		交互作用 (性別×年次)
	下段 (女性)	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	性別	年次	
精神身体的訴え												
1 食欲が無い		.10 (.30)		.05 (.22)		.02 (.13)		.02 (.13)			*	
		.07 (.26)		.17 (.38)		.09 (.29)		.11 (.32)		女>男		
2 吐き気・胸焼け・腹痛がある		.11 (.32)		.08 (.27)		.13 (.34)		.08 (.27)		*		
		.30 (.46)		.20 (.41)		.22 (.42)		.22 (.42)		女>男		
3 わけもなく便秘や下痢をしやすい		.16 (.37)		.21 (.41)		.23 (.42)		.13 (.34)				**4年次：女>男 女性：3<4
		.15 (.36)		.20 (.41)		.11 (.32)		.28 (.45)				
4 動悸や脈が気になる		.08 (.27)		.06 (.25)		.03 (.18)		.06 (.25)				
		.07 (.26)		.09 (.29)		.15 (.36)		.11 (.32)				
16 不眠がちである		.29 (.46)		.18 (.39)		.19 (.40)		.13 (.34)				*男性：1>4
		.15 (.36)		.22 (.42)		.17 (.38)		.20 (.41)				
17 頭痛がする		.15 (.36)		.13 (.34)		.11 (.32)		.10 (.30)				
		.13 (.34)		.09 (.29)		.15 (.36)		.17 (.38)				
18 首筋や肩がこる		.24 (.43)		.21 (.41)		.27 (.45)		.23 (.42)		**		
		.44 (.50)		.39 (.49)		.54 (.50)		.50 (.50)		女>男		
19 胸が痛んだり、しめつけられる		.08 (.27)		.08 (.27)		.06 (.25)		.02 (.13)				
		.09 (.29)		.07 (.26)		.07 (.26)		.13 (.34)				
31 赤面してこまる		.19 (.40)		.13 (.34)		.11 (.32)		.10 (.30)				
		.24 (.43)		.19 (.39)		.22 (.42)		.17 (.38)				
32 どもったり、声がふるえる		.08 (.27)		.11 (.32)		.15 (.36)		.11 (.32)				
		.15 (.36)		.19 (.39)		.19 (.39)		.20 (.41)				
33 身体がほてったり、冷えたりする		.11 (.32)		.08 (.27)		.05 (.22)		.03 (.18)		**		
		.22 (.42)		.17 (.38)		.19 (.39)		.19 (.39)		女>男		
34 排尿や性器のことが気になる		.06 (.25)		.03 (.18)		.02 (.13)		.02 (.13)				**4年次：女>男 女性：1<4,3<4
		.02 (.14)		.06 (.23)		.04 (.19)		.13 (.34)				
46 体がだるい		.16 (.37)		.10 (.30)		.24 (.43)		.26 (.44)				
		.15 (.36)		.19 (.39)		.17 (.38)		.22 (.42)				
47 気にすると冷や汗がしやすい		.11 (.32)		.05 (.22)		.05 (.22)		.06 (.25)				
		.13 (.34)		.09 (.29)		.07 (.26)		.09 (.29)				
48 めまいやたちくらみがする		.18 (.39)		.13 (.34)		.13 (.34)		.11 (.32)				
		.17 (.38)		.17 (.38)		.24 (.43)		.17 (.38)				
49 気を失ったりひきつけたりする		.00 (.00)		.02 (.13)		.00 (.00)		.00 (.00)				
		.02 (.14)		.02 (.14)		.06 (.23)		.04 (.19)				

 *： $p < .05$, **： $p < .01$

は、3年次、4年次よりも高値であった。また、主効果のみがみられた項目を多重比較したところ、「38. ものごとくに自信が持てない」と「39. 何事にもためらいがちである」では、全体を通して女性の方が男性よりも得点が高かった。

「強迫傾向・被害関係念慮」各項目では、「51. こだわりすぎる」(年次： $F(3, 342) = 3.09$, $p < .05$)、「58. 他人の視線が気になる」(年次： $F(3, 342) = 4.09$, $p < .01$)、「60. 気持ちが傷つけられやすい」(性別： $F(1, 114) = 4.46$, $p < .05$)で、有意な主効果がみられた (Table 6)。多重比較を行った結果、「51. こだわりすぎる」では、1年次は4年次に比

べて得点が高く、「58. 他人の視線が気になる」では、1年次は2年次に比べて得点が高値であった。こだわりすぎる面は、年次経過に従って、低くなっていき、視線を気になる程度は、2年次が底になる可能性が考えられる。「60. 気持ちが傷つけられやすい」では、全体的に女性のほうが男性よりも高く報告していた。

「陽性項目」では、「35. 気分が明るい」(交互作用： $F(3, 342) = 2.86$, $p < .05$)で、交互作用がみられた (Table 6)。単純主効果の検定を行ったところ、2年次のときに男性よりも女性が高い得点を報告していた。

以上、項目別に得られた結果について、考察を行った。

Table 5 抑うつ傾向各項目における性別と年次ごとの平均値と標準偏差および分散分析の結果

	上段 (男性)	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		主効果		交互作用
	下段 (女性)	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	性別	年次	(性別×年次)
抑うつ傾向												
6 不平や不満が多い		.19 (.40)		.18 (.39)		.21 (.41)		.18 (.39)				
		.19 (.39)		.15 (.36)		.13 (.34)		.17 (.38)				
7 親が期待しすぎる		.06 (.25)		.03 (.18)		.05 (.22)		.11 (.32)				
		.06 (.23)		.07 (.26)		.07 (.26)		.07 (.26)				
8 自分の過去や家庭は不幸である		.05 (.22)		.06 (.25)		.08 (.27)		.08 (.27)				
		.09 (.29)		.06 (.23)		.07 (.26)		.04 (.19)				
9 将来のことを心配しすぎる		.13 (.34)		.23 (.42)		.19 (.40)		.31 (.46)				
		.28 (.45)		.20 (.41)		.26 (.44)		.30 (.46)				
10 人に会いたくない		.10 (.30)		.03 (.18)		.11 (.32)		.08 (.27)				
		.15 (.36)		.15 (.36)		.13 (.34)		.07 (.26)				
11 自分が自分でない感じがする		.11 (.32)		.05 (.22)		.06 (.25)		.05 (.22)		*		
		.11 (.32)		.06 (.23)		.15 (.36)		.07 (.26)		n.s.		
12 やる気が出てこない		.40 (.49)		.26 (.44)		.32 (.47)		.29 (.46)				
		.37 (.49)		.39 (.49)		.31 (.47)		.43 (.50)				
13 悲観的になる		.21 (.41)		.13 (.34)		.18 (.39)		.13 (.34)				
		.30 (.46)		.20 (.41)		.20 (.41)		.24 (.43)				
14 考えがまとまらない		.31 (.46)		.26 (.44)		.29 (.46)		.21 (.41)		*		
		.48 (.50)		.37 (.49)		.35 (.48)		.31 (.47)		1>4		
15 気分が波がありすぎる		.19 (.40)		.29 (.46)		.26 (.44)		.26 (.44)				
		.37 (.49)		.39 (.49)		.37 (.49)		.28 (.45)				
21 気が小さすぎる		.19 (.40)		.13 (.34)		.11 (.32)		.15 (.36)				
		.24 (.43)		.26 (.44)		.24 (.43)		.22 (.42)				
22 気疲れする		.19 (.40)		.16 (.37)		.24 (.43)		.18 (.39)		*		
		.41 (.50)		.28 (.45)		.26 (.44)		.35 (.48)		女>男		
23 いらいらしやすい		.19 (.40)		.21 (.41)		.27 (.45)		.24 (.43)				
		.39 (.49)		.28 (.45)		.33 (.48)		.33 (.48)				
24 おこりっぽい		.16 (.37)		.13 (.34)		.16 (.37)		.13 (.34)				
		.22 (.42)		.24 (.43)		.22 (.42)		.22 (.42)				
25 死にたくなる		.05 (.22)		.05 (.22)		.03 (.18)		.08 (.27)				
		.09 (.29)		.11 (.32)		.11 (.32)		.09 (.29)				
26 何事もいきいきと感じられない		.10 (.30)		.03 (.18)		.10 (.30)		.03 (.18)				
		.07 (.26)		.09 (.29)		.07 (.26)		.07 (.26)				
27 記憶力が低下している		.19 (.40)		.23 (.42)		.23 (.42)		.23 (.42)				
		.22 (.42)		.28 (.45)		.20 (.41)		.22 (.42)				
28 根気が続かない		.18 (.39)		.11 (.32)		.16 (.37)		.18 (.39)				
		.26 (.44)		.26 (.44)		.24 (.43)		.24 (.43)				
29 決断力がない		.27 (.45)		.26 (.44)		.26 (.44)		.23 (.42)				
		.37 (.49)		.37 (.49)		.35 (.48)		.28 (.45)				
30 人に頼りすぎる		.27 (.45)		.18 (.39)		.24 (.43)		.16 (.37)				
		.35 (.48)		.30 (.46)		.26 (.44)		.20 (.41)				

*: $p < .05$

まず性差については、女性は男性よりも「食欲が無い」、「吐き気・胸焼け・腹痛がある」、「首筋や肩がこる」、「身体がほてったり冷えたりする」、「気疲れする」、「ものごとに自信が持てない」、「何事にもためらいがちである」、「気持ち傷つけられやすい」の項目で得点有意に高かった。女性に特徴的であった項目を俯瞰すると、男性よりも心気症で（身体症状を気にしやすい）、対人場面に敏感で（気疲れや傷つきやすい）で、そして自信のなさ

を報告する傾向があることが示唆された。従来の研究でも、女性の方が男性に比べて身体的な訴えが多いことが報告されており(吉武、1995)、一部一致する結果が得られた。さらに本研究では、従来の身体的訴えが多いことに加えて、対人場面に敏感で自信のない側面も、女性の特徴であることが示唆された。

年次については、「考えがまとまらない」、「こだわりすぎる」、「他人の視線が気になる」の3項目で有意な差がみとめられた。「考え

Table 6 対人不安、強迫傾向・被害関係念慮、陽性項目各項目における性別と年次ごとの平均値と標準偏差および分散分析の結果

	上段 (男性)	1 年次		2 年次		3 年次		4 年次		主効果 性別	交互作用 年次 (性別×年次)
	下段 (女性)	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
対人不安											
36	なんとなく不安である	.29 (.46)	.11 (.32)	.26 (.44)	.18 (.39)					*	*2年次・4年次：女>男 男性：1>2, 女性：3<4
37	独りでいると落ち着かない	.06 (.25)	.06 (.25)	.08 (.27)	.05 (.22)						
38	ものごとくに自信を持ってない	.17 (.38)	.13 (.34)	.11 (.32)	.13 (.34)					*	
39	何事もためらいがちである	.19 (.40)	.19 (.40)	.18 (.39)	.15 (.36)					女>男	
40	他人に悪くとられやすい	.30 (.46)	.41 (.50)	.26 (.44)	.24 (.43)					*	*
41	他人が信じられない	.18 (.39)	.15 (.36)	.08 (.27)	.10 (.30)					女>男	n.s.
42	気をまわしすぎる	.31 (.47)	.30 (.46)	.24 (.43)	.20 (.41)					*	*2年次：女>男 女性：2>3, 2>4
43	つきあいが嫌いである	.08 (.27)	.03 (.18)	.05 (.22)	.06 (.25)					*	
44	ひげ目を感じる	.13 (.34)	.22 (.42)	.11 (.32)	.09 (.29)						
45	とりこし苦勞をする	.13 (.34)	.03 (.18)	.06 (.25)	.08 (.27)						
		.13 (.34)	.11 (.32)	.11 (.32)	.11 (.32)						
強迫傾向・被害関係念慮											
51	こだわりすぎる	.31 (.46)	.23 (.42)	.21 (.41)	.19 (.40)						*
52	くり返し、確かめないと苦しい	.22 (.42)	.15 (.36)	.15 (.36)	.09 (.29)						1>4
53	汚れが気になって困る	.24 (.43)	.13 (.34)	.17 (.38)	.13 (.34)						
54	つまらぬ考えがとれない	.06 (.25)	.10 (.30)	.11 (.32)	.06 (.25)						
55	自分の変な匂いが気になる	.07 (.26)	.06 (.23)	.09 (.29)	.06 (.23)						
56	他人に陰口をいわれる	.15 (.36)	.15 (.36)	.21 (.41)	.13 (.34)						
57	周囲の人が気になって困る	.13 (.34)	.15 (.36)	.17 (.38)	.17 (.38)						
58	他人の視線が気になる	.05 (.22)	.03 (.18)	.06 (.25)	.00 (.00)						
59	他人に相手にされない	.06 (.23)	.06 (.23)	.11 (.32)	.06 (.23)						**
60	気持ちが傷つけられやすい	.11 (.32)	.09 (.29)	.06 (.23)	.09 (.29)						1>2
		.41 (.50)	.24 (.43)	.22 (.42)	.28 (.45)					*	
		.03 (.18)	.00 (.00)	.03 (.18)	.02 (.13)						
		.07 (.26)	.07 (.26)	.06 (.23)	.07 (.26)						
		.13 (.34)	.03 (.18)	.11 (.32)	.13 (.34)					女>男	
		.24 (.43)	.22 (.42)	.20 (.41)	.17 (.38)						
陽性項目											
5	いつも体の調子がよい	.18 (.39)	.21 (.41)	.15 (.36)	.26 (.44)						
20	いつも活動である	.20 (.41)	.22 (.42)	.28 (.45)	.17 (.38)						
		.16 (.37)	.13 (.34)	.11 (.32)	.13 (.34)						
		.13 (.34)	.13 (.34)	.20 (.41)	.15 (.36)						
35	気分が明るい	.16 (.37)	.10 (.30)	.21 (.41)	.08 (.27)						*2年次：女>男
		.19 (.39)	.24 (.43)	.13 (.34)	.17 (.38)						
50	よく他人に好かれる	.05 (.22)	.05 (.22)	.05 (.22)	.06 (.25)						
		.06 (.23)	.09 (.29)	.06 (.23)	.11 (.32)						

*: $p < .05$, **: $p < .01$

がまとまらない」と「こだわりすぎる」については、経年に沿ってなだらかに減少していることから、精神発達や自我同一性の確立によるメンタルヘルスの安定が推察される。他人からの視線が気になる程度は、1年次に顕著に高く、その後（2年次）で減少していることから、新入学で人間関係に神経過敏な状態が結果に表れている可能性が考えられる。性差と年次の交互作用については、「わけもなく便秘や下痢をしやすい」、「排尿や性器のことが気になる」で、女性のみを経年による変化がみられ、女性の4年次にこの症状を訴える人が多くなっていた。中井他（2007）においても、女性は便秘・下痢について多く報告しやすいこと（自覚症状中上位10項目以内）や、前垣・滋野（2011）においても上記2項目は女性の方の得点が高いことが指摘されている。しかしながら、本研究のように4年次で消化器系や生殖系の不調を訴えが上昇する理由として、就職・進学活動といったストレスが女性の場合は便秘や下痢、生理不順といった部分に反映されやすい可能性が考えられる。

4. UPI 項目別回答率

UPIの項目別に回答率を算出した（Table 7）。男女別に各年次で上位10項目に当てはまるものを強調して示した。男性、女性ともに年次に関係なく上位10項目に入っていたのは、「12. やる気が出てこない」、「14. 考えがまとまらない」、「18. 首筋や肩がこる」、「29. 決断力がない」であった。また「15. 気分が波がありすぎる」、「22. 気疲れする」、「23. いらいらしやすい」、「30. 人に頼りすぎる」、「36. なんとなく不安である」についても、若干女性のほうが上位10項目に選ばれていることは多いが、おおむね男性も上位10項目に選ばれていた。

中井他（2007）の上位10項目と比較すると、14、15、18、22、23、29、36が共通している

ことが明らかになった。西山・笹野（2004）と比較すると、15、18、22、29、36が共通しており、前垣・滋野（2011）と比較すると、12、14、15、18、22、23、36が共通していた。すべての研究で上位10項目に入っていたものを列挙すると、「15. 気分が波がありすぎる」、「18. 首筋や肩がこる」、「22. 気疲れする」、「36. なんとなく不安である」となり、共通の項目が明らかになった。これらの項目は、中井他（2007）が指摘しているように、情動の不安定さや疲労感、自己不確実性を示している項目であり、現代の大学生にある程度共通してみられる傾向である可能性が再度支持された。

結論

本研究の調査結果から以下のことが明らかになった。

1. A大学における「自覚症状」「Key項目」「陽性項目」はこれまで報告のある他大学の結果と変わらず、良好であった。
2. 年次（経年）による変化は、「対人不安」でみられ、1年次で得点が一番高く、4年次になるにしたがって減少していた。「考えがまとまらない」「こだわりすぎる」においても、1年次をピークに4年次に向かって減少傾向であった。「他人の視線が気になる」については、2年次に得点が大きく減少し、入学時の影響が強かったことが明らかになった。
3. 性差は「対人不安」でみられ、女性のほうが男性よりも得点が高かった。「首筋や肩がこる」「気疲れする」「何事にもためらいがちである」など8項目で女性の得点が高値だったことから、女性には、身体的訴えや対人場面での敏感さが強く、あまり自分に自信が、もてないという特徴がみられる可能性が示唆された。
4. 年次と性別の両方の要因の影響がみられたのは、「精神身体的訴え」得点で、男性は

Table 7 UPI 項目別の回答率

(%)

	男性				女性			
	1年次	2年次	3年次	4年次	1年次	2年次	3年次	4年次
1 食欲が無い	9.68	4.84	1.61	1.61	7.41	16.67	9.26	11.11
2 吐き気・胸焼け・腹痛がある	11.29	8.06	12.90	8.06	29.63	20.37	22.22	22.22
3 わけもなく便秘や下痢をしやすい	16.13	20.97	22.58	12.90	14.81	20.37	11.11	27.78
4 動悸や脈が気になる	8.06	6.45	3.23	6.45	7.41	9.26	14.81	11.11
5 いつも体の調子がよい	17.74	20.97	14.52	25.81	20.37	22.22	27.78	16.67
6 不平や不満が多い	19.35	17.74	20.97	17.74	18.52	14.81	12.96	16.67
7 親が期待しすぎる	6.45	3.23	4.84	11.29	5.56	7.41	7.41	7.41
8 自分の過去や家庭は不幸である	4.84	6.45	8.06	8.06	9.26	5.56	7.41	3.70
9 将来のことを心配しすぎる	12.90	22.58	19.35	30.65	27.78	20.37	25.93	29.63
10 人に会いたくない	9.68	3.23	11.29	8.06	14.81	14.81	12.96	7.41
11 自分が自分でない感じがする	11.29	4.84	6.45	4.84	11.11	5.56	14.81	7.41
12 やる気が出てこない	40.32	25.81	32.26	29.03	37.04	38.89	31.48	42.59
13 悲観的になる	20.97	12.90	17.74	12.90	29.63	20.37	20.37	24.07
14 考えがまとまらない	30.65	25.81	29.03	20.97	48.15	37.04	35.19	31.48
15 気分が波がありすぎる	19.35	29.03	25.81	25.81	37.04	38.89	37.04	27.78
16 不眠がちである	29.03	17.74	19.35	12.90	14.81	22.22	16.67	20.37
17 頭痛がする	14.52	12.90	11.29	9.68	12.96	9.26	14.81	16.67
18 首筋や肩がこる	24.19	20.97	27.42	22.58	44.44	38.89	53.70	50.00
19 胸が痛んだり、しめつけられる	8.06	8.06	6.45	1.61	9.26	7.41	7.41	12.96
20 いつも活動である	16.13	12.90	11.29	12.90	12.96	12.96	20.37	14.81
21 気が小さすぎる	19.35	12.90	11.29	14.52	24.07	25.93	24.07	22.22
22 気疲れする	19.35	16.13	24.19	17.74	40.74	27.78	25.93	35.19
23 いらいらしやすい	19.35	20.97	27.42	24.19	38.89	27.78	33.33	33.33
24 おこりっぽい	16.13	12.90	16.13	12.90	22.22	24.07	22.22	22.22
25 死にたくなる	4.84	4.84	3.23	8.06	9.26	11.11	11.11	9.26
26 何事もいきいきと感じられない	9.68	3.23	9.68	3.23	7.41	9.26	7.41	7.41
27 記憶力が低下している	19.35	22.58	22.58	22.58	22.22	27.78	20.37	22.22
28 根気が続かない	17.74	11.29	16.13	17.74	25.93	25.93	24.07	24.07
29 決断力がない	27.42	25.81	25.81	22.58	37.04	37.04	35.19	27.78
30 人に頼りすぎる	27.42	17.74	24.19	16.13	35.19	29.63	25.93	20.37
31 赤面してこまる	19.35	12.90	11.29	9.68	24.07	18.52	22.22	16.67
32 どもったり、声かふるえる	8.06	11.29	14.52	11.29	14.81	18.52	18.52	20.37
33 身体がほてったり、冷えたりする	11.29	8.06	4.84	3.23	22.22	16.67	18.52	18.52
34 排尿や性器のことが気になる	6.45	3.23	1.61	1.61	1.85	5.56	3.70	12.96
35 気分が明るい	16.13	9.68	20.97	8.06	18.52	24.07	12.96	16.67
36 なんとなく不安である	29.03	11.29	25.81	17.74	40.74	35.19	25.93	44.44
37 独りでいると落ち着かない	6.45	6.45	8.06	4.84	16.67	12.96	11.11	12.96
38 ものごとに自信を持ってない	19.35	19.35	17.74	14.52	29.63	40.74	25.93	24.07
39 何事もためらいがちである	17.74	14.52	8.06	9.68	31.48	29.63	24.07	20.37
40 他人に悪くとられやすい	8.06	3.23	4.84	6.45	12.96	22.22	11.11	9.26
41 他人が信じられない	12.90	6.45	9.68	3.23	12.96	9.26	7.41	7.41
42 気をまわしすぎる	14.52	8.06	8.06	12.90	16.67	16.67	20.37	12.96
43 つきあいが嫌いである	8.06	3.23	8.06	4.84	9.26	16.67	16.67	11.11
44 ひげ目を感じる	14.52	3.23	9.68	9.68	16.67	12.96	16.67	18.52
45 とりこし苦労をする	12.90	3.23	6.45	8.06	12.96	11.11	11.11	11.11
46 体がだるい	16.13	9.68	24.19	25.81	14.81	18.52	16.67	22.22
47 気にすると冷や汗がでやすい	11.29	4.84	4.84	6.45	12.96	9.26	7.41	9.26
48 めまいやたちくらみがある	17.74	12.90	12.90	11.29	16.67	16.67	24.07	16.67
49 気を失ったりひきつけたりする	0.00	1.61	0.00	0.00	1.85	1.85	5.56	3.70
50 よく他人に好かれる	4.84	4.84	4.84	6.45	5.56	9.26	5.56	11.11
51 こだわりすぎる	30.65	22.58	20.97	19.35	22.22	14.81	14.81	9.26
52 くり返し、確かめないと苦しい	20.97	12.90	11.29	16.13	24.07	12.96	16.67	12.96
53 汚れが気になって困る	6.45	9.68	11.29	6.45	7.41	5.56	9.26	5.56
54 つまらぬ考えがとれない	14.52	14.52	20.97	12.90	12.96	14.81	16.67	16.67
55 自分の変な匂いが気になる	4.84	3.23	6.45	0.00	5.56	5.56	11.11	5.56
56 他人に陰口をいわれる	1.61	4.84	3.23	1.61	11.11	9.26	5.56	9.26
57 周囲の人が気になって困る	16.13	12.90	19.35	14.52	24.07	24.07	12.96	16.67
58 他人の視線が気になる	24.19	12.90	22.58	19.35	40.74	24.07	22.22	27.78
59 他人に相手にされない	3.23	0.00	3.23	1.61	7.41	7.41	5.56	7.41
60 気持ちが傷つけられやすい	12.90	3.23	11.29	12.90	24.07	22.22	20.37	16.67

2年次以降で減少傾向、女性は2年次以降も横ばいか上昇傾向という性差によって異なる得点変化がみられた。また女性は4年次に消化器系や生殖系の不調を訴える人が増加することが明らかになった。4年次には就職活動などのストレスイベントが多いため、便秘や生理不順といった側面に表れやすい可能性が考えられた。

5. UPIの項目別回答率の上位10項目を他大学の結果と比較したところ、情動の不安定さや疲労感、自己不確実性を示す項目に共通していた。

以上のことから、A大学のメンタルヘルスは概して良好であることが明らかとなった。また年次経過に伴うメンタルヘルスの結果から、性差によって異なる変化をみせる自覚症状があることが示唆された。

本研究の問題点として、まず挙げることができるのは、ドロップ率についてである。調査人数としては164名に実施したが、分析対象としたのは116名であった。これは全回答者数の70%に過ぎないことと、そして、それ以上に分析しなかった30%の学生の中に精神的問題や経済的問題等を抱えて、不登校、休学や退学といった事情により、ドロップアウトした学生がいる可能性が十分に考えられる。学生へ援助を提供していく上で、ドロップアウトした学生のメンタルヘルスの特徴や変化を検討しておくことは、とても重要であると考えられる。今後の研究では、ドロップアウトした学生も分析対象とし、その特徴を明らかにしていきたい。また本研究で明らかになった結果は、X年の学生を対象とした調査であったため、調査人数が少なく、結果にも調査対象学年が元々もっている特色が反映されていた可能性が考えられる。A大学では、継続して毎年4月に全学を対象としたUPI

調査を実施しているため、他年度のデータを合算して分析する必要があるだろう。これにより、特定の年度入学学生の特徴を抑え、A大学の学生の特徴的なメンタルヘルスの変化を把握でき、予防や早期介入といったより質の高い援助活動に繋げることができるだろう。

引用文献

- 福田真也 (2007). 大学教職員のための心のケア・ガイドブックー精神科と学生相談からの15章ー金剛出版
- 願興寺礼子・小塩真司・桐山雅子 (2007). 中部大学新入生の心理的健康の年次的変化ーUPIの得点、健康や精神衛生上の問題・治療歴の有無、悩みの有無、内容についてー 中部大学教育研究7、63-68.
- 前垣綾子・滋野和恵 (2011). UPIによる大学生の精神的健康の実態 北海道文教大学研究紀要35、115-126.
- 中井大介・茅野理恵・佐野 司 (2007). UPIから見た大学生のメンタルヘルスの実態 筑波学院大学紀要2、150-173.
- 西山温美・笹野友寿 (2004). 大学生の精神健康に関する実態調査 川崎医療福祉学会誌14、183-187.
- 坂口守男 (2009). 学生の精神的・身体的自覚症状の動向ー最近5年間のUPIでみた推移ー 大阪教育大学紀要 第三部門58、45-55.
- 沢崎達夫・松原達哉 (1988). 大学生の精神的健康に関する研究 (1)ー筑波大学新入生に対するUPIの結果ー 筑波大学心理学研究10、183-190.
- 吉武光世 (1995). UPIからみた新入生の心の健康状態についてー他大学との比較をとおしてー 東洋女子短期大学紀要27、33-42.